

コメント

フィールドにおける軌跡をつなぐ

徳田治子

(川村女子学園女子大学)

昨年7月にこのワークショップの司会を依頼された時、私は二つ返事でお引き受けしました。果たして、自分に司会としての任を果たせるのかといった問題について思いをめぐらせる間もなく、松嶋さん、大倉さん、松本さんのお三方が、各々ご自身の研究の歩みをお話くださるという企画の魅力に惹きつけられていました。

当日のワークショップは、会場となった名古屋だけでなく、近畿、関東からの参加者も加わり、年齢や学年、研究領域もかなりバラエティに富んだ方々の中で議論が進行してきました。少々長いのではないかと心配していた6時間という時間も、あっという間に過ぎていきました。

「転がる」「転がり続ける」をめぐって

このワークショップに司会として参加し、今回、当日の記録を改めて読み返すなかで、私が特に印象的だったのは、ワークショップの副題にある「転がる」「転がり続ける」という言葉をめぐってなされた議論でした。

二つ返事で司会をお受けしたこともあり、私自身は、今回のワークショップのタイトルの「転がり続ける」という言葉の意味をそれほど気にとめていませんでした。それが、第2部に入り、参加者一人ひとりが自己紹介を進めるなかで、かなりの数の参加者が、この「転がり続ける」というタイトルに言及しながら、ご自分の「行き詰まり」や「転がらずに滑っている感じ」「停滞」「転がらないで滑って」「どんどん土や砂がいっぱいきて埋まっている感じ」について述べられました。私自身の研究状況も「転がる」よりも、むしろ、行き詰まっていたり、「潜伏」している感じがあったこともあり、登壇者3名の「転がる」

感じと参加者や私自身の「行き詰まる感じ」を分けているものは何なのだろうか、そんなことを考えながら、各々の発言に耳を傾けていました。

「大きな物語」「小さな物語」「あいだの物語」

ポストモダンや構成主義的な考えが広まるなかで、「大きな物語」が終焉し、「小さな物語」とその生成過程にスポットがあてられるようになってきました。そのなかで、研究者自身が対象にむける視点や行為に対する省察的な態度が質的研究ないしはフィールド研究を行う上で重要な営みとして位置づけられるようになっていきます。

「現象は何か?」「ここで示されていることは何か?」「この人が伝えようとしていることは何か?」という問いは同時に、それをとらえる私（研究者）自身の視点や視線を問いかけるものとして跳ね返ってきます。見る者と見られる者、そしてその関係性から立ち現れてくる「あいだの物語」をいかなるものとして扱うか。「転がり続けること」をめぐるいくつかの議論は、そのような研究者としての「わたし」を各々の立場や状況から探り、新しい言葉を見つけようとする時間だったのではないかと思います。

3人の軌跡

企画者の一人でもある松本さんは、当日の発表のなかで、ご自身が大変なロックファンであることに言及しながら、「ロールし続けることこそ、学問（学び問う）においては大事なのではないか」「ロックンロールは、語るものではなく、示すもの」と述べています。そして、「ロックンロール（学問）を実現する」ために「僕らができること」は、「松嶋さんや大倉さんのような面白い研究をしている、つまりロールし続ける存在に同舟しながら（まねしたり、乗り越えるようにしたり）、僕らもロールし続けること」だと述べています。

今回、改めてワークショップの記録を読み返しながら、松本さんが言う「ロールし続ける存在」が私たちに示してくれた軌跡とはどんなものだろうと考えてみました。果たして、この考察により、お三方が乗られている舟に同乗する手はずが整うかは甚だ怪しいのですが、経験から得られた貴重な知見を分けてくださった心ばかりの返礼として、当日の各々の発表を振り返りながら、若干のコメントをさせていただこうと思います。

研究者の変容をどう組み込むか?

松嶋さんは、発表中、何度も「今から思えば」という言葉を発しながら、1年目で論文

化した当時のフィールドワークにおけるご自身の視点を、「あら探しをしていたかもしれない」「実践で行われていることの中のかなり偏った部分だけを自分は見えていたのではないか」と批判的に振り返られる一方で、「3年かかって、やっとここまできたのかという見方もできるのですが、私は、でも、1年目に得た結論が決して間違いではないだろうと思っています。」と同時に肯定する態度を示しています。そして、その3年間の過程の中で得たご自身の気づきを、「相容れない声を聞きながら、そのなかで自分がどういえば両方にとって納得のいく話になるか、そして子どもが救われる話になるかなと考えてやっている」と教育現場におけるフィールドワーカーの貢献として積極的に位置づける立場を示すとともに、それを現在取り組まれているご自身の実践に結びつけていることをお話くださいました。

自らの軌跡を批判的に振り返りつつ、その時点での自分をその肯定すること、そして、その変容のなかで得た気づきや知見をしっかりと捉え、続く研究・臨床実践につなげていくこと。松嶋さんの軌跡は、そのような研究者自身の変容をどのように位置づけ、研究を進めていくかという「転がり続け方」を私たちに伝えているように思いました。

対象との出会いのなかで

大倉さんは、大倉さんのアプローチを特徴づける「語り合い法」「メタ観察」といったオリジナルな方法が、いくつかの変遷と段階を経るなかで生まれ、試行錯誤のなかで磨かれてきたものであることをお話してくださいました。「わたし」自身の体験を積極的に盛り込んでいく現在の記述スタイルについても、最初は少なからず抵抗感があったこと、にもかかわらず、それらを一つの方法として確立するまでに至ったのは、語り合いのなかで立ち現れてきた「須賀君」の生きる＜風景＞や＜匂い＞、大倉さん自身が青年期に経験した激しい動揺のありようにもつながるそれらの確かな感触をいかに第3者に伝えていくかという課題に対して、切実と言えるまでの誠実さをもって対峙した結果であることを伝えてくださいました。このことは、続いて発表なさった松本さんの「事象と方法に関して徹底的に思考する」という言葉ともつながり、私たちが、質的研究のなかで、対象と方法の問題にどう挑んでいくかを考える上で重要な示唆を含んでいると思います。また、現在ご自身が直面している問題としてお話してくださった、大学教員の立場から、学生たちといかに出会っていくかというお話は、対象や問題との出会いのなかで、その理解のあり方を問い、新たな知の生成という頂を目指していく大倉さんの「転がり続ける」姿勢を伝えているよ

うに思いました。

質的研究ないしはフィールドワーク研究がめざす一つの頂

高齢者の外出の意味を「同行調査」という独自の方法でアプローチしてきた松本さんも、ご自身の研究の歩みを振り返るなかで、最初から「同行調査」という方法を思いついたわけではないこと、「アンケート調査」、「インタビュー調査」「追跡調査」といった様々な手法を試しながらも、「外出時に何が起きているのか」という問いにせまることができず、これ以外の方法では応えようがないという（ご自身の言葉を借りると）“消去法的”な選択から「同行調査」を行うに至ったことをお話くださいました。また、「少し言葉にすることができるようになった今から考えても、同行調査という方法論を位置づけることはそう簡単な問題ではなかった」と述べ、その道のりが決して平坦なものではなかったことを伝えています。このような歩みは、大倉さんの「語り合い法」にいたる過程と重なり合う部分が多いように思います。最後に、松本さんは、そのようなご自身の歩みがたどり着いた現在の到達点を、「研究における挑み方（生き方）と知見は連動している」と表現され、そのことがご自身の研究のなかでどのように位置づけられるかを「包含」という概念を軸に説明なさいました。

「ローカルな知」の生成には、「ローカルな方法」を研ぎ澄ませていくことが重要である。そして、その「方法」と「対象」を結ぶ研究者自身の在り方こそが、「転がり続ける」ことを通して紡がれ、磨かれ、軌跡として積み重なっていくものではないか。今回のワークショップを通して私が学んだことは、このようなことではないかと思っています。